

『へ個人』の行方

ルネ・ジラールと現代社会

西永良成著
大修館書店

ひとくちに外国文学・文化の研究者の仕事と言ってもそれはさまざまで、その認識の仕方も人によってまちまちだが、外国の重要な知識人の知的活動を紹介し、かつ、日本的思考や知へその適用を試みるというのも大切なひとつであることは多くの人が認めるところであろう。本書は、その仕事の重要性をあらためて認識させてくれた本であった。こんにち私たちが、ルネ・ジラールの主要な著作の殆どを日本語で読める状況になっているとはいえ、ひとりの思想家の著作をすべて読破し、その思想体系を整理し、会得することは並大抵な作業ではない。しかし、本書ではルネ・ジラールの思想が実に分かり易く整理されており、これを読めばそのエッセンスが把握でき、そればかりか、それを敷衍化するためのヒントまでがふんだんに盛り込まれている。「思想」というへ硬いイメージとは裏腹に、言葉遣いはきわめて平易でアカデミズムの世界以外の人にもわかり易く、ジラールの思想の射程範囲を、会社内のいじめや教室内の暴力といった卑近な例にまで広げ、「思想する」ことが決して研究室や教室の中のみのものでないことを教えて

くれる。さらに、ジラールの論の提示の仕方も極めて親切で、読者が忘れた頃を見計らって、すでに述べたことも重複を厭わず何度も喚起させてくれるほか、ジラール本人をはじめとするさまざまな思想家の著書からの引用文の後は、必ず著者によるへかみ砕いたへ平易な言い換えが施されているところも非常にありがたかった。難解な表現をこねくり回した学問書が多い中、難しいことを易しく解説するということの大切さを痛感させてくれたのである。

さて本書は、ルネ・ジラールの理論Ⅱ仮説の全体像が提示されている前半部分と、それに照らして現代社会を考察する後半部分に分けることができる。前半部分では、まず第一章でルネ・ジラールの理論の三つの命題、すなわち欲望の模倣（ミメーシス）理論、文化の基礎としてのスケープゴート理論、そして、その二つの理論Ⅱ仮説が『福音書』に啓示されているという彼の主張を概観したうえで、第二章においては夏目漱石の『行人』を用いて第一の命題（欲望の模倣理論）を、第三章においては深沢七郎の『樫山節考』を用いて第二の命題（スケープゴート論）を検証・考察している。

この部分で大変興味深く読んだのは、『行人』への応用部分であった。従来『行人』は一郎説話を中心に読まれてきた。しかし、もしこの作品にジラールの欲望の三角形理論、すなわち人間は決して主体的、自発的に欲望することはできず、必ず媒介者の欲望に触発された結果、それを模倣することによってしか欲望対象を見いだせないという論を応用するならば、一郎と二郎を個々の登場人物として捉える

よりは、この作品を一郎と二郎のふたりの関係、さらに言えばふたりの欲望の相互媒介的関係の物語として読まねばならないと著者は言う。一郎と二郎はライバル関係にあり、一郎にとってはお直よりも二郎の方に強い「固着」があり、和歌山の一夜で試したかったのもお直の「節操」ではなく、二郎が自分の欲望を模倣してくれるかどうかだった。だからこそ弟がその期待に応えてくれなかったと知ったとき、一郎は節操を守った妻に満足するどころか、「急に色を変えて沈黙し、みずからを「永久の敗北者」になぞらえたのだという。まるで人間そのものに備わった本能のように一般には信じられている恋情も、実は人間が自発的に抱く感情ではないのだ。こうしたジラルルの考え方は、ミラン・クンデラとの共通性が考察されている第四章において、引用されているクンデラの言葉「もし幼年時代から愛の模範に従うように誘われていなかったとすれば、そのことが、つまり愛するとはどういうことなのか、はたして私たちが知るだろうか」にも表われている。ジラルルによれば、「恋の自発性や運命性を信じようとするのはロマン主義の不自然さわまりない嘘、神話」であり、「近代の大小説家たちはただそのような人間の欲望の模倣性を認識していたばかりでなく、その機能を冷静に観察し、きわめて正確に記述している」という。

実はこうした視点は、私が現在取り組んでいる一九世紀のブラジルの作家のマシャード・デ・アシスの研究をすすめるうえでも大きなヒントになるものである。たとえばマシャードの『ドン・カズムーロ』という作品は、やはり一

人の女性をめぐる二人の男性の親友同士を巻き込むいわゆる三角関係の物語で、以前から『行人』との類似性が気になっていた作品である。従来この作品は、主人公のベント・サンティアゴか、あるいは女性のカピトゥに焦点が当てられるのが主流であったが、ジラルルの欲望の模倣理論から考えれば、その男性同士のライバル関係から作品を捉えることも可能だからである。

後半部分では、第四章でジラルルの「反ロマン主義」とミラン・クンデラの「反感傷主義」の共通性が考察され、第五章では未曾有の画一化を生きる現代社会における「個人」の行方が探られている。ここで印象に残ったのは、「ある意味で人類共通の理想」だったにも拘わらず、増大すればするほど却って「調和」ではなく、「競争」が生み出されてしまう「平等」の「悲しき側面」である。「不平等が社会の共通法則であるときには、最も著しい不平等も目につかない。しかしすべての人々が殆ど平等化されているときには、どんな小さな不平等でも目につく」というトクヴィルの言葉とともに紹介される「平等の悲しき側面」を読むと、私たちは現代の日本社会の悪しき平等を思い浮かべないわけにはいかない。とりわけ私たちが携わっている教育現場では、これまで「平等」が理想視される傾向にあり、その結果学校間の序列化や小学校の通知票の数値による評点の廃止、そして、運動会の徒競走では順位がつけられなくなるという現象が起り始めた。だが、その結果はどうであろうか。理想的な教育環境は整ったのであろうか。現在、再び都立の伝統校復活などの再序列化、すなわち「不平等化」を起

こそうという動きを目の当たりにするとき、「民主的平等の逆説」を痛感せざるを得ない。

こんにち新聞や雑誌のどこを見てもへ集団の時代から個人の時代への変換といった表現が踊っている。同時に叫ばれているのがへ自分の価値観を持つことへやへ自己責任を果たすことへである。そういった表現が溢れる世の中で本書を読むと、果たしてへ個へとは何なのか、いや、それ以前に、その概念自体が可能なのかと考えさせられる。

(武田千香)

